もお賣り申します依つてに何卒お歸りを願ひます、お酒をばお商ひ申しますから」
「そんなら何か、行たら酒を一合でも賣ると貴樣の主人が然う言ふたのか」
「ヘェ、左樣に申して居られます依つてに、何卒お歸りを」
「然うか、態ア見され、オイ喜いやん」
「なんや」
「喧嘩はこつきが得やな、彼れだけ言ひたい事を言ふてやつた依つて吃驚してけつかる、これから行て五合程飲んで行こうか」
「何卒お歸りなさつて」
「アヽ歸つてやるぞ」
「ヘェ大阪の二人衆を呼び戻して來ました」
「アヽ大阪の衆か、何卒此方へ這入つて下され、イヤイヤ御遠慮には及びません、ズッと此方へ這入つて下されー、コレ宗兵衛」
「ヘェ」
「お酒の宜いのを出して注いであげい」
「どうも濟みません」
「藤助、表の閉りをして門を入れい」
「オイ清やん、何や可怪い工合やで、ナア清やん」
「何やお前いがた〳〵慄へてるな」
「何んにも慄うてエへんねが、身體がガタ〳〵動いて來た、オイ見てみ、藏から若い奴等が薪木を提げて出て來たで」
「オイ大阪の二人の衆、酒は旨いか」
「甚い好い酒で誠に美味しい」
「そうやろう、それが末期の水と思ふて味宜う飲んで置け」
「エーエ何と言ふのんや」
「さて大阪の衆、私は此家の主人ぢやが、今次の間で聞いて居たら、お前さん方何とか言ふて居なさつたなア、イヤまあスツトコドツコイやとか、揺木やとかは何うでも宜いが、唯聞捨にして置けんのは、ど運附と言ふて居なさつたなア」
「ハイ言ひました」
「如何いふ譯でど運附ぢや、そのど運附の因緣聞かんうちはお前さん方を表へ出す事は出來ません、返答が出來るならさつしやれ、如何言ふ譯ぢや」
「成程、ど運附の因緣を貴郎聞きたいのんか」
「左樣ぢや」
「イヤ話しませう、貴郎が坐つて居なさる、その後の障子に貼つてある、それは何だすか」
「これか、これはお前さん日本長者鑑、持丸番附とも言ふて、金持ばかり書いてあるのぢや」
「ヘェー、それを此處では何と言ひますか」
「何と言ふて、長者番附、金持番附と言ひませう」
「ヘェー、これは大阪では運附番附と言ひます、書いてはございませんけども、これを運附番附、ど運附番附と申します」
「これが何で運附番附ぢや」
「サア貴郎は御存じなければ私はお話申しますが、大阪の今橋に鴻の池善右衛門といふ仁があります」
「それやお前さんが言はいでも、番附に此通り大關に書いてある、何處へ行ても知らん者はありません」
「然うでせう、この鴻池と言ふのは元は大阪で始めて酒を造りなさつたんで、その酒を造らへて居た時分は今の樣な清酒は出來なんだ、皆往昔は濁酒であつたので、すると酒を造つて居るうちに、若い者が度々小使を貸せ、錢を貸せと言ふので、遂には、然う度々一寸貸をするとやゝこしいので斷りを言ふと、サア奉公人が怒つて惡口を吐いてからに、手焜火鉢を酒桶の中へ投込んで出て行て仕舞ふた。すると或時濁をば汲出さうと